

JAグループ主催
「ごはん・お米とわたし」作文コンクール
秋田県最優秀賞（全国優秀賞）

パンよりごはん

仙北市立松木内中学校 一年 鈴木隼斗

僕は今、中学一年生、身長は一七七センチメートルある。学校で一番、身長が大きい。僕のお父さんも身長が大きい。これは、遺伝なのかどうなのか、それとも家でお母さんやおばあちゃんが作ってくれるごはんのおかげなのか。きっと、ごはんだと思う。なんでも言われると、僕はこう答える。

「だって家、農家だから。」

僕は、小さい時から今までの事を思い出してみた。いつも、どんな時でも米だった。みんなは朝ごはんにパンを食べている。それを聞いてうらやましかった。僕もパンが食べたい、その気持ちを家族に言うべきか、いややめよう。でも、やっぱり言うてみようと思って、次の日の朝、初めて家族に言った。

それは確か、小学校四年生の頃だったと思う。家族に言うだけのことなのに、しかもパンの話。今思えばくだらないことだけど、その時の僕にとっては、重大なことだったからドキドキして、緊張

していた。

そして、ついに朝がきた。どうしよう、言いたくない、いろんなことを思った。初めて家族に自分の気持ちを素直に言えた日だった。このあと僕は、おじいちゃんにノックアウトされてしまうんだけど。

「なんで家、パン出ないの？」

家族みんな、僕を見た。お母さんまで、コイツ、何言ってるんだ？って顔をしていたのを、はっきりと覚えている。

「おめ、農家さ生まれで、パン食いでえのが。家さ米じっぱりあるから、パンなんか食わねくてもいいべー！」

おじいちゃんが言った。小学四年生の僕には、辛い言葉だった。米じゃなくてパンが食べたかっただけなのに。だから、僕も頑張ってた言った。

「だって、みんな食べてるもん。」

すっきりした。でも、その気持ちは、一瞬で壊れた。

「おめ、みんな食べでるがら食べでって言うども、せば、みんな死ぬねばおめも死ぬのが。おめは、家の何を見てきたんだ。」

僕の思いは、おじいちゃんに伝わらなかった。口をとがらせて、まゆ毛をつりあげて言われたら、もう何も言えなかった。お母さんも、おじいちゃんに何も言わなかった。ずっと僕を見ていたけど、僕は泣きそうだったから、顔を合わせなかった。僕の味方をしてくれると思っていたお母さんが、僕の味方をしないで、平気な顔をしてごはんを食べているから、とても腹がたった。お母さんも、家

族みんな嫌いだ、と思った。

次の日、いつも通りに起きてきた僕は、思わず笑顔になった。テーブルに食パンがあったから。おばあちゃんは、おはようとあいさつをして、

「おめ、これ食いでがったんだべ。お母さん買ってきてらっけがら、焼いだっだよ。」

僕、うれしかったけど泣きたかった。昨日、みんな嫌いつて思ったのに、味方をしてくれなかったお母さんが買って来てくれた。僕のために。初めて朝ご飯で出たパンは、カリカリしていて、とてもおいしかった。おじいちゃんは、何も言わずに食べていた。心の中で「おめだつて、パン食べでるねが。」と思った。

それ以来、時々パンが出るようになった。何より、僕を怒ったおじいちゃんが、家でパンがいつでも食べられるようにと、ホームベーカリーを買ってきた。あんなに怒っていたのに、ホームベーカリーを見る顔はニヤニヤしていてうれしそうだった。

今僕は、毎朝お米を食べている。家の米はおいしい。家で飼っている牛のふんが肥料になっているから。僕は二杯は必ず食べる。パンを食べるようになって改めてわかった。

家の米がおいしいと思った時、おじいちゃんが言いたかったのは何か、わかった気がした。おじいちゃん、僕も大きくなりました。